野生生物の知見収集研究メンバーによる意見交換会概要

（１）事業の今後の方向性について

・ 自然局では「絶滅のおそれのある生物のモニタリング調査」、「緑の国勢調査」、また生物多様性センターで行なっている「モニタリングサイト１０００」など既存の事業があり、研究者が中心ではあるが、日本国内の野生生物観察者の情報はある程度把握している。ExTEND2005 の趣旨を踏まえた上で、既存事業との住み分けと連携が有効に機能するような体制にすること。そのためには、今後もしばらくは同様の形で大会を続けて、環境省側で一般観察者の情報をある程度蓄積した上で、事業の骨組みを考えていくこと。
・ 一般観察者の情報をある程度蓄積できた時点で、ExTEND2005 の趣旨に沿った観察情報に焦点を絞っていく必要があるが、趣旨に沿わなかった観察テーマについても、関連する他事業が受け継ぐことができるような体制とすること。
・ この大会を継続していくことによって、野生生物や環境へ関心を持つ人のネットワークが広がることに意味がある。身の周りの環境で起きている様々な現象や変化が起こっている理由について、定性的な見方だけではなくある程度定量的に理解できるようにこちらがサポートしていくことによって、化学物質に対してもより正しい理解が得られる助けになる。
・ 国立環境研究所などの専門家を上手に生かした体制とすることが望ましい。世界的には、米国を中心としたネットワーク ”Long Term Ecological Research (LTER) ”や、大学の指導のもとに地域の子ども達が協力して継続的な観察データを収集していくシステムがある。

（２）大会の運営について

・ 一般公募で参加者を募るのが理想的だが、大会の知名度が上がるまでは難しい。特定のテーマに沿って発表を行なう企画型と、希望する人を広く受け入れる一般公募型を組み合わせた形が望ましい。
・ 例えば、日程の半分を企画テーマに充てて、発表 20～30 分、質疑応答 10 分程度を確保して、ある程度フォーカスする。残りの時間は一般公募の発表者を含めてポスターセッションとすれば、アンケート回答で多かった発表時間が短いという問題も解決し、かなりの応募数があっても対応できる。
・ 企画型の場合は、オーガナイザーを決めて準備委員会などを立ち上げるなど、念入りな準備が必要になる。テーマについては、生態学の分野であれば「場所」を決めて募集すると比較的まとまりやすい。
・ 大会を一般公開にする場合は、事務局の体制を強化し、様々な準備や対策

が必要である。

- 大会を一般公開にしない場合は、自然局や他省庁の野生生物関連の事業の担当者に参加を呼びかけ、相互のネットワークが広がるように努めること。
- 来年の一般公募等の周知については、参加者のデータ整理や予定を確保するために、大会概要（開催時期、発表方法、募集人数など）について、環境省ホームページ、専門雑誌、生物教員の集まりなどを通じて予告を行なってはどうか。

（３）その他

- 環境省が提案した野生生物観察者のネットワーク（具体的にはメーリングリスト）については、利用者に趣旨がよく理解されていない可能性があることから、環境省の目的や利用方法などを整理してから再提案すること。

以上